天御殿も焼るとや思ひけん時に城主まさ人陽
つゝ一番に義光へ申こゝ年ば好き陣ならんと斯
の事遠入道に謀て種仕を生捕り謀書を認めて能登
守の陣へ行く書付の村々沼津が沿不の前まで出
は文を帯して迎ひ入れ伊賀守殿の印を文を取
まこと見せまこば書まこばこゝて疑の心出来ける間
城中一仕となくひそめき立て心よろぶ村長何方よ
りか立てらひん城中と敵陣者の境辻堂のあら方
よ落書ける

能登守殿有御笠原なるうせば義光公へ首を迎海
是は能登守殿別心あるて陣中の謀いたけまでも有録但
馬笠原出雲とて家老共と諫められ忠義の道を
失はずして城にあるといもせん家臣の探るやう
見えるうえをあらず沼津好き事なると悦び城
主よりを出すしば一色山砦にて出張油断
なべきにあらば自今以後軍評定も延海なる事
城につるべうべとて紀伊の接物なるけ紀伊
ども大剛の延海なきば京都に計集をべきも叶